

こらっせ便り



2019年4月4日

【編集・発行】「福島子ども・こらっせ神奈川」

TEL : 045-353-9008

Eメール : info@korasse-kanagawa.org

8月5日(月)～7(水)、山北・横浜で 「リフレッシュプログラム」を実施します!

「福島子ども・こらっせ神奈川」事務局 横山満里奈

2019年のリフレッシュプログラムを8月5日(月)～7(水)に、例年通り山北町、横浜市を会場に素敵なプログラム内容を考えています。皆様、今年もご支援を宜しくお願い致します!

3月には、大学生の「こらっせユース」と事務局スタッフで実行委員会が開催され、次のリフレッシュプログラムに向けた取り組みが動き出しました。新しいメンバーも増え、これからの活動がとっても楽しみです!3月10日には、横浜市の像の鼻パークで開催された3.11追悼イベントにも参加しました。多くの人を訪れる中、夕闇の中で、ろうそくの明かりが灯っている様子は幻想的で、不思議な空間を作り出していました。



こらっせユースでは、福島県楢葉町の学童保育にお邪魔し、子ども達と交流します。今回は3月26～27日と4月2～3日行き、3月に行った学生の活動報告は今回のこらっせ便りにも掲載されていますので、ご覧ください。また、ご支援を頂いているパルシステムが主催する3月28～30日に開催された福島親子保養にも、こらっせユースが参加させて頂きました。こちらも別の機会に改めてご報告します。

5月には会場となる山北町の宿泊施設の見学を行います。そして5月12日(日)には、「TEAMママベク」で活動されている千葉由美さんを講師にお招き、キックオフミーティングを開催致します。日常生活では知る機会が少ないので、貴重な機会となると思います。併せてこらっせユースから、リフレッシュプログラムの紹介や学童保育、パルシステム保養の報告も行う予定です。ぜひご参加ください!!

震災から8年が経過したところで、子ども達や現地のニーズが変化し、私達も考えなくてはいけないことが多々あります。今年は、WEBでの活動内容の発信を積極的に行いたいと思っています。今までは、なかなか手が付けられなかったのですが、多くの人に活動に興味を持っていただけるよう、工夫したいと思っています。

こらっせに限らずですが、震災関連の事業は長い目で支援が必要な活動だと思っています。こうした活動を通して、得られる繋がりは一生涯ものです。学生や事務局スタッフを含め、この様なご縁を大切に今後も続けていきたいと思っています。今後ご支援を宜しくお願い致します。

牛山元美医師が講演

福島若年者甲状腺癌の現状

3月2日（土）にこらっせ神奈川が参加している「いのち・神奈川」が主催をして、さがみ生協病院内科部長牛山元美先生に「福島若年者甲状腺癌の現状」のお話をして頂きました。こらっせのメンバーを含め40名を超える参加者があり、牛山先生の中身の濃いお話しに会場は熱気にあふれていました。



ヨウ素を材料として、甲状腺ホルモンをつくります。そのホルモンは全身の新陳代謝を活発にして、骨や脳の神経に関わり、子どもの成長や人間が生きていくのに欠かせない働きをします。

甲状腺癌の原因とされる放射性ヨウ素は原発事故発生当時、どのように広がったのでしょうか？放射性ヨウ素の放出と、甲状腺癌の発症とは、比例しているため、唯一因果関係が世界的に認められています。ところが日本では、その放射性ヨウ素の初期測定をしていないのです。パニックを恐れて高く出る数値を無視しようとしたとのお話でした。

しかし、ICRPが安全値の限界としている、100mSv以上汚染された地区は、福島県内の11町村にものびました。しかも、避難指示が出されないまま、一か月以上もそこに住み続けた子供達は、80~100mSv以上の被曝を受けたとされています。

にもかかわらず国は知らんぷりです。また甲状腺を守るための緊急措置として、飲むべき「安定ヨウ素剤」を配られ飲むことが出来たのは、福島県立医大と原発作業員とごく一部の住民のみだったそうです。

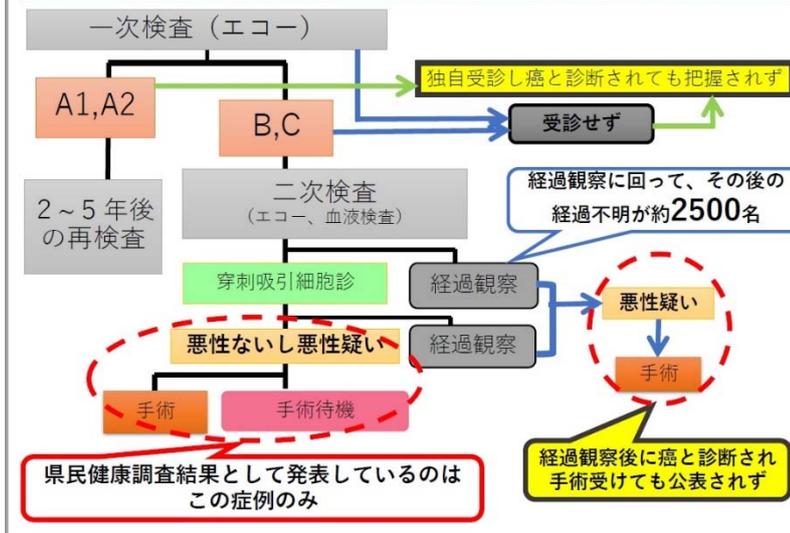
また、事故当時、甲状腺癌の初期検査をしたのは3月中の5日間だけで、わずか1080人というお粗末さです。

茨城の守谷では母乳からも50ベクレルの放射性物質が検出されました。神奈川県では事故のあった3月に1か月分の汚染の集計をしたというお話がありました。3月22日に寒川浄水場では67.8Bq/kg、綾瀬浄水場では3月23日に55.7Bq/kgも検出されています。いずれもヨウ素131です（現在の基準は10ベクレル）、セシウムは検出されていません。

定期的な診断は欠かせない

事故当時に、お腹にいた赤ちゃんから18歳までを対象に、福島全県を2年ごとに検診車が回ってエコー検査をしています。今、4巡目です。現在、甲状腺癌と判明した人が273人になりました。実はこの数字は、過去28年間に日本で甲状腺癌になった患者数の、なんと60倍の比率になるという状況です。異常な多発と言えるのでしょうか。しかも

県民健康調査 甲状腺検査の流れ



1 巡目に異常なしと言われたのち、わずか2年後に急に癌と診断された子どもが、なんと65名もいるというのです。ベラルーシの専門家さえも「信じがたいことが起きたのか」と首をひねっています・・・。

さらに一回の検査では、クロと判断できずに、経過観察に回された子供達が、約2500名いますが、その子供達のその後がどうなったのか、経過が明らかにされていません。従って、その子供達

の中に癌を発症した子もっと含まれているのではないかと心配されています。福島県立医大や福島県は全体像を把握しようとしないので、実数がわからないのです。

そして、甲状腺癌には約20種類の種類があります。分化癌（乳頭がん・濾胞がん）と未分化癌に分けられます。分化癌は、甲状腺癌のうちの90%を占めるもので、発育が非常に遅く、10年生存率が95%という大変予後のいいものですが、これは成人の場合です。子どもの場合は成長が早く肺への転移や浸潤が多いなどの特徴があり、未分化癌へ進むこともあるとされています。未分化癌は、非常に悪性で分裂の激しい恐ろしい癌です。すでに手術を受けた120例は、今すぐ手術の必要性のあるものばかりで流布されています。過剰診断や過剰治療には当たらないという結果が分かっています。

必要なのは正しい情報と知識の周知

福島県内では、リスクコミュニケーションと称する「安全だよ・心配ない」というキャンペーンが大変盛んです。山下俊一・福島県アドバイザーなどは、内向きには「深刻なレベルだ」と言いながら、福島県民に向っては「100mSvまでは心配ない。ニコニコしていれば大丈夫!」と言っています。不安を煽るから甲状腺検査は縮小すべきという学者や医者達が沢山います。

子供達の父母は戸惑い、受診率も年々下がってきています。子供達は親の同意がなければ検査を受けることが出来ないのです。

福島県や国の手口はこうです。誰も責任を取らない、被害者や世論を混乱させ、対立させ、分断する、データを取らない。時間稼ぎをする、被害の過小評価をするような調査をする。被害者を疲弊させ、あきらめさせる。認定制度を作り被害者数を小さく絞り込む、御用学者を呼び国際会議を開く・・・などです。

とにかく正しい情報と正しい知識を周知させること。子供達の健康を長く見守り、検査を続けて適切な措置をすることが不安を取り除くことになります。内部に取り込まれた放射性物質は何十年にもわたり体内に存在し、傍を通る血液を被曝し続ける、それが恐ろしいことなのです。

早期検診・早期診断・早期治療は鉄則。それを妨げて適切な治療を受けさせないことは最大の人権侵害です。

こらっせユース、春休みに学童支援！！

3月26日から27日、「こらっせユース」(大学生)が、檜葉町の子ども園で行われている学童保育の支援に行き、子どもたちと思い切って遊んできました。参加したメンバーの感想です。

檜葉の人達の子どもへの思いを感じる 坪井 香澄

私は震災後の福島を訪れたのは初めてです。あおぞらこども園の周辺の街並みは綺麗で新しい住宅が並んでいる印象を受けましたが、「檜葉に転校してきた」と言う子どもの話からも震災の残した陰が感じられました。また、こども園の園庭には「きぼうの木」が立っています。この木の周りで小学生も園児も一緒になって楽しそうに遊んでいる姿を見て、町の力強さと町の大人が子どもたちに抱く希望を感じました。

今回は学生の企画として車の工作を行いました。子どもたちが自分の好きな絵を描けるようにしたのでゲーム機やキャラクター、乗り物など自分だけの車を作ったのではないかと思います。車を走らせるコースにはジャンプ台や的で遊べるようにしたので学年に関係なく楽しんでいました。



個性あふれる車を製作 古屋 結麻

体育館でゴムの引っ張る力で走る車の工作を行いました。車体を製作する際に、初めはデザインを思いつかない子もいましたが、何を作るか一緒に考えたので、みんな熱中して自分の好きなものをモチーフにしたり、なるべく遠くに走らせるために風の抵抗を受けにくいデザインにしたりと個性あふれる車を完成させました。今回の学童応援は2回目です。何度も参加している学生は、子どもたちとの信頼関係を築いているようで、継続的に活動をするのが大切と感じました。

異学年の子ども集団に学び 熊谷 健太

私は4度目の学童となりました。一昨年夏に5年生だった子たちは、この春から中学生になります。時の流れの早いことを実感しました。同時に彼らの6年間の学童生活の中のほんの一部に自分がいる幸せも感じました。外遊びで印象的だったのはテレビ番組の企画を、身近なものの利用と工夫で補いながら自分たちの遊びとして消化していることでした。学童という学校とは違う異学年混同で生活する環境下で彼らが多く学びを得て、互いに成長しあっていることが伺えました。

生まれ育った檜葉に思い 佐藤 聡

今回初めて学童に参加しました。私は檜葉町で生まれ、小学校6年までこの地で育ってきました。そんな思い入れのある町の学童で応援ができたことはとても嬉しかったです。初めは子どもたちと仲良くできるか不安でいっぱいでした。でもすぐに子どもたちの方からなついてくれました。

車の工作は、好きなものを絵に描き台車を設置して走らせるというものでした。でこぼこ道や坂道などのオリジナルコースで走らせたり、友達と競い合ったりととても楽しそうでした。屋外でのボール遊びは、久々に体を動かしたので帰るころには足がパンパンになりましたが、子どもたちと過ごした時間はとても楽しく、一日があつという間に感じました。今後もぜひ参加したいです。